文化資源としての人と文学
―小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）をめぐって―

小泉　凡

はじめに

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン／一八五〇～一九〇四）は、明治日本のフォークロアを文学として世界に発信した作家として知られる。島根県松江市をはじめとする八雲ゆかりの各地では、小泉八雲を人的資源として観光や地域文化の創造に活かす取組を行っている。本稿では、筆者が関わった実践例の紹介を通して、「人と文学」の社会的活用の可能性を模索してみたい。

なお、タイトルにある「文化資源」とは文化財を含む地域文化の総体をさすが、とくに未評価の小さな文化を観光や地域振興、まちづくりなど社会的に活用する際に使用する新しい概念だ。文化資源学会の設立趣意書によれば、文化資源学の目的は「文化資料体を新たな視点から新たな媒体によって再利用し、次代の文化基盤として活用する方法を研究すること」(1)にあるとされている。本稿でも、その趣旨に沿って、文化を地域や社会を元気にする宝として再評価し、それを創造的に活用する行為を「文化資源的活用」と呼ぶことにしたい。

一．松江と小泉八雲

松江市は、島根県の県庁所在地で県東部に位置する。もともと宍道湖・大橋川に臨む小漁村だったが、一六〇七年に堀尾吉晴により松江城築城が開始。以後、城下町として発展する。松江において文化資源として活かされる歴史上の人物は、同地にお茶と和菓子の文化を根づかせた松江松平家七代藩主・松平不昧（一七五一～一八一八）(2)と明治期の小泉八雲が出色といえる。

小泉八雲は、ギリシャのレフカダに生を享け、アイルランド、フランス、イギリスで教育を受け、十九歳で単身渡米。赤貧の生活の中から希望をみいだし、ジャーナリストとしてシンシナティ、ニューオーリンズ、カリブ海のマルティニーク島でのべ二十年を過ごした。ニューオーリンズ万博で垣間見た日本文化やチェンバレンによる英訳『古事記』に描かれた出雲神話の世界に魅了され(3)、特派記者として三十九歳で来日。日本定住を決め込み、松江、熊本、神戸、東京と移り住み、教師や英字新聞の記者をしながら、精力的な執筆活動を通して日本の基層文化の魅力に迫った。最晩年の著作『怪談』は八雲の代表作として広く世界で読み継がれている。

一八九〇年八月、八雲は松江に赴任する。それは前任のカナダ人英語教師が退任して島根県尋常中学校に英語教師の空席ができたことによるが、「民族揺籃の地」(4)としての出雲への憧れを抱いていた八雲にとって、この赴任はかけがえのない希望の実現となった。八雲は松江を「神々の国の首都」と呼び、次第に魅了されていく。(5)それは、夢の中にさすような穏やかな光に彩られる宍道湖の風景、民俗学者としての関心事（民俗信仰、怪談など）が豊かなこと、毎朝牛乳が飲め、洋食を食べられる環境があり健康が維持できたこと(6)、とことん信頼できる人々に巡り合ったことなどがその理由だといえよう。

松江には一年三か月。五十四年の人生で最短の途中下車だったが、伴侶となる小泉セツとも出会い、八雲にとって特別な場所となる。そこで実践したフィールドワークの成果は、『知られぬ日本の面影（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）』（一八九四）として上梓され、初版が二十六刷に達するベストセラーになった。今も、とりわけ海外の旅行者にとってはガイドブックとしての役割を果たしている。一九三四年に小泉八雲の書誌を上梓したP．D．パーキンズは、「松江や出雲ほど、直接みたことのない人たちに熟知されている都市や地方は、ほかにちょっとあるまいと思う。（中略）これほど完全な旅行ガイドブックをもった地方は世界に稀であろう」(7)と同書を評価している。

八雲の没後、一九三三年には、八雲旧居の隣接地に教え子の街頭募金による浄財等で小泉八雲記念館が建設され、旧居も一九四〇年に史蹟名勝天然記念物保存法に基づき史蹟指定を受け、一般公開されるようになった。二〇一六年七月十六日には、三十二年ぶりに小泉八雲記念館が増床・リニューアルされ、床面積は約三倍となった。両施設には、近年では年間十五万人ほどの入館者があり、松江城、武家屋敷、八重垣神社などと並び同地を代表する文化資源・観光資源となっている。

二．聴覚でとらえた松江―小泉八雲と耳の文学

八雲は、物心ついたころにはすでに父の実家があるアイルランドの首都ダブリンにいた。母は気候と異文化の壁に阻まれ、八雲が四歳の時にギリシャに帰国する。八雲は大叔母の庇護を受け、アイルランド語を母語とするキャサリン・コステロという乳母から妖精譚や怪談を聞き、そこに至福の時を見出していった。晩年、アイルランドを代表する詩人、ウィリアム・バトラー・イェイツ（一八六五～一九三九）に「私はアイルランドの事物を愛すべきだし、また実際愛している」(8)と書き送り、その理由として、怪談や妖精譚を語る乳母がいたことをあげている。八雲の耳はこのようにして語りの文化の中で研ぎ澄まされていったのだった。

その後十六歳の頃に左眼を失明し、右眼の視力も日本時代には〇・〇五ほどまで下がっていたことは、彼の近眼鏡の度数からわかる。その分、視覚以外の五感が開かれていった。人生で一番長く滞在したアメリカ・ルイジアナ州のニューオーリンズでは、巷で演奏されるジャズの胎動期のクレオール音楽を採集し、五線譜に書き取って友人の音楽評論家クレビールに送っていた。たとえば、黒人がバンジョーのようにピアノを弾く、ラグタイムと思われる音楽を聴いたことを報告したりしている。当時、ポピュラー音楽は、ミュージック（音楽）ではなくノイズ（雑音）だと認識された時代だ。『古事記』を英訳し、『日本事物誌』という事典まで書いた日本学者チェンバレンでも、「もし、『音楽』というあの美しいことばをやむなく引きずり下ろして、東洋人が漫然と弦を爪弾いたり、声をキーキー張り上げて歌ったりするようなことまで、その意味内容に含めるとすれば、神話時代このかた、日本にも音楽が存在したと考えられる」(9)などと酷評している。これに対し、八雲は以下のように反論する。

> 私が感銘と魅力を覚え続けてきましたのは、つねに原始的な音楽でした。アフリカの音楽とスペイン系アメリカの旋律に私はすっかり夢中になっております。そして、これらはいずれも高度な音楽的感覚とは無縁のものと見做されるでしょう。(10)

ジャズ評論家の油井正一は、八雲がニューオーリンズの滞在をもう五、六年延ばしていたら、ジャズ黎明期の音楽が蓄音機などより正確に書き残されたであろうと述べている。(11)そんな偏見のない耳をもって来日した八雲は、松江の町でさっそく音の採集を始めたのだった。

松江の一日は、寝ている私の耳の下から、ゆっくりと大きく脈打つ脈拍のように、ズシンズシンと響いてくる大きな振動で始まる。柔らかく、鈍い、何かを打ちつけるような大きな響きだ。その間の規則正しさといい、包み込んだような音の深さといい、音が聞こえるというよりも、枕を通して振動が感じられるといった方がふさわしい。その響きの伝わり方は、まるで心臓の鼓動を聴いているかのようである。それは米を搗く重い杵の音であった。（中略）

それから禅宗の洞光寺の大きな梵鐘の音が、ゴーンと町中に響きわたる。すると今度はわが家に近い材木町にある地蔵堂から、朝の勤行を知らせるもの悲しい太鼓の響きが聞こえてくる。そしていちばん後に、朝早い物売りの掛け声が始まる。「大根やい、蕪や蕪」と。大根などのほかに見慣れない野菜を売り歩く声とか、炭に火をおこすための細い薪の束を売る「もやや、もや」という、女の哀調を帯びた声などが聞こえてくるのである。(12)

「米搗きの音」「洞光寺の鐘の音」「地蔵堂の勤行」「物売りの声」など、「サウンド・スケープ」という概念が一九六〇年代にカナダの作曲家マリー・シェーファーによって提唱される七十年以上前から、町の音を、文化の一翼を担う重要な要素として受け止め、観察していたことがわかる。同時に地味で平凡な地域の暮らしを積極的に観察する常在観光の態度を垣間見ることもできる。

民俗学者の柳田國男も優れた五感力をもつ人だった。『明治大正史世相編』（一九三一年）の「風光推移」の項では、明治期から大正期にかけて江戸の世相の変化を感じるのは、目より耳の方に起因することが大きいと言っている。たとえば、物売りの声が整理されて聞こえなくなったことに物足りなさを感じることから、町の音が都市のハーモニーの大切な一翼であることを説いている。このような先人の五感力、耳の力をまちづくりや地域文化の創造に活かすことは、現代社会においてとても大切なことだと思われる。

八雲の『知られぬ日本の面影』がロングセラーにもなった大きな理由のひとつに、単なる見聞した事実を過去形で綴った紀行文ではなく、五感、とくに耳を研ぎ澄ませて、身体感覚でとらえた明治の松江を現在形の文体(13)で蘇らせていることによるものと思われる。

三．未来に活かす八雲の五感力―「子ども塾―スーパーヘルンさん講座―」

そんな小泉八雲の五感力を活かす地域教育のプロジェクト「子ども塾」が始まったのは二〇〇四年、小泉八雲没後百年にあたる年のことだった。「小泉八雲百年祭実行委員会」の中で、「学会招聘とパフォーマンスだけでなく、未来の松江を担う子どもたちに、現代社会の中でも輝きを失わない小泉八雲の意味を継承する企画を！」という声があり、それを実践したのが「子ども塾―スーパーヘルンさん(14)講座―」である。

当時、小学生の自然体験の不足が社会問題として浮上していた。日の出や日没を肉眼で見たことない子ども、魚捕りや虫捕りをしたことがない子どもの増加。またゲーム感覚で、人間は簡単に生まれ変わると誤解する、つまり死や命の意味について理解していない子どもの増加など、凶悪事件の低年齢化とともに社会問題として取り上げられた。バーチャル体験の急増と五感体験の不足は、感情のコントロールの不全という問題と深い関係にあるのではないかという指摘がなされるようになった。

五感力が欠如しているということは、「感覚を統合して現実をリアルなものとして感じ取る回路がうまく機能していないこと」(15)で、現実感がなく他者や自分の存在感も希薄になり、さらには生きることに自信が持てなくなってしまう。また、感覚を統合して現実をリアルなものとして感じ取れないというリスクも出てくる。教育学者で身体論を研究している齊藤孝や、ノンフィクション作家の山下柚美は五感研究の先駆的存在で、五感力を育むことの大切さを種々の実践活動を通して説いている。また、環境省も『感覚環境のまちづくり事例集～こんな”まち”がいい感じ～』（二〇〇九）をつくり、熱・光・音といった感覚環境の新しい視点からまちづくりをしていくべきだとする提言を行っている。さらに鎌倉の寺院や地域ボランティア、それに早稲田大学池田雅之ゼミや地元の大学生らで構成する、生きる力と心を育むプロジェクト「かまくら寺子屋」が『寺小屋教育が日本を変える』（成文堂、改訂普及版、二〇一三年）というタイトルで実践活動の成果を世に出すなど、学校教育を補完する地域教育の必要性にも注目が集まりつつある。

以来、松江の「子ども塾」は、「町の音」「蝉の声」「海辺の生活」「民話」「怪談」「虫の音」「人力車」「怪談屋敷」「まち歩き」「生物多様性」「新八景」など、毎年、少しずつテーマと活動場所を変えて、思春期を迎える小学校四年生から中学生を対象に、小泉八雲を通して五感を磨き地域を学ぶ教育実践として夏休みに開催してきた。小泉八雲を学ぶのではなく、八雲が明治の

松江で五感を研ぎ澄ませて観察した行為を現代の松江で追体験することから、地域の自然や文化の魅力を発見していこうとするものだ。それが「スーパー」ヘルンさん講座と名付けた所以だ。直近の二〇一六年の例では、まち歩きの達人、堀江一夫氏から「まち歩きのコツや楽しみ方」について学び、八雲のように好奇心と五感を研ぎ澄ませて城下町「松江」を散策。そして、五感で楽しめるスポットを掲載したマップ「ヘルンまちブラマップ」を作成した。みんなで同じ場所を歩いても、ひとりひとり五感に響くものが違い、興味をもつスポットも異なる。それぞれが、魅せ方の工夫をこらしてマップを一日がかりで作成し、市役所の正面玄関に八月いっぱい掲示した。

このようにほぼ毎回テーマにふさわしい特別講師を迎え、さまざまな五感体験をしてきた。漫画『小泉八雲』の著者・作画者大西洋一氏、山陰の民話研究の第一人者である酒井董美氏、俳優の佐野史郎氏、「学校の怪談」の著者で民俗学者の常光徹氏、兵庫県立人と自然の博物館で動物・昆虫・植物を専門とする研究員の方々、講談師で画家の川東丈純氏ほか、多くの地域の専門家の方々にもお世話になった。

小泉八雲に関わる文化事業という位置づけから松江市観光文化課には事務局をお願いし、さらにこのプロジェクトに共感するメンバーで実行委員会を立ち上げた。そこには島根県内の小学校教員、保護者、環境問題の専門家、スポーツや身体のインストラクター、オルガニスト、島根県立大学短期大学部の教員や学生など、多くの方が加わってくださった。こういった地域の様々な方たちの協力を得て、地域ぐるみで子どもを育てることは、とても尊いことだと思っている。

「子ども塾」の効果を数字で測ることは難しい。しかし、松江城の中でペアになって一人が目を閉じて歩くブラインド・ウォークをした際、ある小学生が、「はじめて森の匂いを感じた」「目を閉じただけで不安になった。ヘルンさんは目がほとんど見えなかったから、ずっと不安の中で生きていたのではないか」と感想を語った。また、松江市八雲町にある荒神の巨大な神木を観察した際、「この大きなスダジイの木には他の種類の植物がいっぱい棲んでいる」ことを見つけた小学生もいた。兵庫県立人と自然の博物館と連携し、虫の音の聞き分けを行った時には、大谷剛研究員のレクチャーと実践指導を受けた。「島根の子どもたちは神戸の子どもたちよりずっと耳がいい！」と褒められ、参加者は大変自信を持つことができた。これから塾通いや部活動が忙しくなっても、恐らく自転車をこぎながら虫の音を聞き分けてくれるのではないかと期待している。

毎回実施する参加者のアンケートや記念誌『子ども塾スーパーヘルンさん講座の十年』に寄せられた文章から総合的に判断すると、「五感を使うことで地域の気づかなかった魅力を発見できた」「さらにそれを追及して見たくなった」という点に収斂できるようだ。現に、「子ども塾」への参加がひとつのきっかけとなって筆者の勤務先短大に入学した学生もいる。その一人であるKさんは「子ども塾」の印象について、「中でも『子育て幽霊』のお話は今も覚えています。そしてこれを機に、小泉八雲のこと、妖怪のことに興味をもつようになりました。（中略）五感をすべて使って、体全体で感じたことは、大人になっても忘れない宝物です」と回想する。[16]その点では、「子ども塾」の実践は、広い意味の「地域教育」であり、教育を通じた「地域おこし」であるといえるだろう。

かつて作家の五木寛之さんと松江城の内堀を巡る堀川遊覧船上で対談したことがあった。その時、「松江ほど都市の中に自然がある町を知らない。作家が自然を書かなくなって長いが、この町に住んだら書きたくなる。八雲の気持ちがわかる」と言われた。心に響く言葉だった。そしてこんな豊かな自然を活かした五感教育を継続するようにと激励してくださった。

日本には地域の魅力としての「八景」を探し愛でる文化が古くからある。近江八景や横浜の金沢八景が代表例だろう。この着想は、中国起源であるが、江戸時代には日本中に浸透していった。八景には、視覚的な風景ばかりでなく「夜雨」「晩鐘」「落雁」「晴嵐」などを詠みこみ、五感を使ったその地域の美の表現がうかがわれる。豊かな感性、五感力による文化の創造は日本の伝統でもあるのだ。

四．資源としての小泉八雲と怪談

松江では、他にも小泉八雲を人的資源（人財）として、また怪談という無形の文化資源を活かす種々の試みが実践されている。

①松江ゴーストツアー

その代表的なものに松江ゴーストツアーがある。これは、城下町松江に豊富に伝承される人柱伝説をはじめとする怪談を、着地型観光プランを創出してツーリズムに活かす実践だ。怪談は地元の民話研究者や八雲がすでに採集・再話して活字にしているものの、資源的活用には至っていなかった。発想のきっかけは、二〇〇五年八月に体験したアイルランド・ダブリンのゴーストバス。それは「ダブリンのとり憑かれた聖堂の謎解き」をテーマ

に、お化けの絵でラッピングされた二階建てバス（市バス）で、プロの語り部の怪談を聞きながら、数か所の墓地や「ドラキュラ」の著者ブラム・ストーカーゆかりの地に立ち寄るもので、参加者の遊び心と恐怖心と知的好奇心をバランスよく刺激するツアーだった。そしてノーベル文学賞作家をここ一世紀で三人も輩出した文学の都、ダブリンの特長を現代的感覚で巧みに活かしているようにも感じた。ダブリンには、近年国立レプラコーン博物館もオープンしており、妖精伝承は国の宝と認識されていることがわかる。

翻って、松江を眺め渡したとき、同じように豊富な怪談が伝承され、作家小泉八雲によって主な話は英語で世界に発信されている、つまりゴーストツアーの「ストーリー」がすでに存在していることを改めて感じたのだ。帰国後ただちに、二〇〇六年から指定管理者制度により松江市内の四つの観光文化施設の管理運営はじめたＮＰＯ法人松江ツーリズム研究会と協議し、同年夏に試験的にゴーストツアーを実施した。その後、恒常的な観光商品化を同ＮＰＯ法人と検討し、国土交通省のニューツーリズム創出・流通促進事業の助成金を得て、ガイドの公募、研修を行い、三名のプロのガイドを育成した。ガイドには、小泉八雲研究、地域文化研究、口承文芸研究、語りの技法、ホスピタリティー論という五つの観点から研修を受けることでモチベーションを高めてもらった。

二〇〇八年八月、ついに「松江ゴーストツアー」がスタート。「カラコロコース」（ゴーストツアーのみ）と「へるんコース」（ゴーストツアー＋筆者の講演・宍道湖七珍の懐石料理）の二コースを設定した。ツアーでは、日が暮れてから、ガイドの語りを耳で楽しみながら松江城内のギリギリ井戸、月照寺、清光院、大雄寺などの怪談スポットを二時間余りかけて徒歩で巡る。

二〇一六年七月末までの八年間で土曜日を中心に二百七十六回実施し、四千五百六十六名の参加者がゴーストツアーを楽しんだ。とくに二〇一三年度は出雲大社の大遷宮の影響もあり、参加者は前年比一五二％で六百四十六名に上った。開始当初は、県内者が多くを占め、夜のまち歩きで地域の魅力を再発見できたと喜ばれたが、ここ四年ほどは七十パーセント以上が県外からの観光客で、わざわざこのツアーにあわせて山陰旅行を計画する方も増えている。

八年近くにわたって一度も赤字を出さずに松江ゴーストツアーが継続できたことは奇跡的といえるかもしれない。八雲はかつて帝国大学の授業で、超自然の文学には一面の真理があらわれているので、この先お化けや幽霊が信じられない時代がきても人々の真理に対する関心は

松江ゴーストツアー開催状況

年　度	開催回数	参加者数	1回の平均	県外者割合
2008	19回	475人	25.0人	33%
2009	39回	627人	16.1人	46%
2010	41回	727人	17.7人	40%
2011	41回	584人	14.2人	74%
2012	33回	424人	12.8人	64%
2013	39回	646人	16.6人	82%
2014	29回	519人	17.9人	75%
2015	26回	388人	14.9人	73%
2016(7月末)	9回	176人	19.6人	71%
合計・平均	276回	4,566人	17.2人	62%

＊NPO 法人松江ツーリズム研究会提供のデータにより作成。

不変だと予言した(17)が、その言葉の意味をあらためて噛みしめている。それにしても小泉八雲と城下町の怪談を絡み合わせた物語(ストーリー)を導き、自然にブランド化が推進できたことは幸運だった。またアイルランドの豊かな異界性と怪談を資源としてとらえる先見性に学べたことにも感謝している。

今後も、松江ゴーストツアーでは、「豊かな遊び心」「耳で楽しむ夜の松江」「闇への畏怖の念」「地域文化の魅力を楽しみつつ学ぶ」という四つのポリシーを継承していかなければならないと考えている。

松江では、松江ゴーストツアーを核としながら、他にも作家・怪異蒐集家で『新耳袋』の著者、木原浩勝氏と筆者の対談「松江怪談談義」、松江出身の俳優佐野史郎氏とギタリスト山本恭司氏による「小泉八雲朗読の夕べ」を年一回の恒例イベントと位置付け、さらに二〇一一年に開催された小泉八雲記念館企画展「小泉八雲のKWAIDAN展 ―翻訳本と映画の世界―」(18)の全国巡回などを通して、松江を怪談のふるさととする構想も進められている。二〇一六年七月十六日にリニューアル・オープンした小泉八雲記念館の企画展示のテーマも「怪談―再話文学の永遠性―」とし、超自然文学の普遍性を発信するとともに、第二展示室に設置した「再話コーナー」では、佐野史郎氏の朗読と山本恭司氏の音楽で八雲

が再話した山陰の怪談五話（「小豆とぎ橋の橋姫」「大雄寺の子育て幽霊」「川津の河童駒引き」「持田の浦のこんな晩」「幽霊滝の伝説」）が楽しめるようにしている。

松江からみて東の境港が妖怪のふるさと、西の出雲市が神々のふるさと、南の雲南市が神話のふるさと、そして松江は怪談のふるさと。山陰の異界性と無形文化をツーリズムに活かす取組が山陰各地で進んでいる。高度成長期においては負の資源と認識された怪談文学や妖怪伝承を、地域の宝のひとつと再評価しつつある現状には満足しているが、「超自然の物語の中の真理」を説いた八雲の精神を忘れぬように、異界観光を提案していく必要があるだろう。つまり地域の居住者にも、「怪談のまち」が矜持となるような、単なる一過性の肝試しやお化け屋敷的イベントではない資源化が必要だといえる。

②現代アート展「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」

これは、二〇〇九年にギリシャ人の八雲の愛読者タキス・エフスタシウ氏によって提案された、現代アートを通して八雲の精神性の根幹にある「オープン・マインド（開かれた精神）」を地域文化の創造や持続可能な共生社会の実現に活かそうというプロジェクトだ。「オープン・マインド」は、ポジティブ、平和志向で、しかも世界中の人々が理解しやすい魅力的なキーワードであり、タキス氏の提案に強く共感した。

アート作品は、世界のアーティストへウェブ上で呼びかけ、共感するアーティストからハーンの精神性や生き方をテーマとした造形作品を寄せてもらう。寄贈が原則なので、美術館が行う特別展の五分の一ほどの予算規模で実施することができる。二〇〇九年十月にギリシャ・アテネのアメリカン・カレッジで第一回目の造形美術展“The Open Mind of Lafcadio Hearn”が実現。世界十か国のアーティストから寄贈された作品四十七点とともに、八雲のオープン・マインドをうかがわせる文章を、「偏見のない美意識」「人間中心主義への警告」「偏見のない人種観」「開かれた耳と音楽観」などキーワード毎に選び、抜粋して壁面に紹介した。オープニングの会場は五〇〇人もの来訪者でごった返し、大きな反響が見られた。

第二回目は二〇一〇年十月に松江城天守閣と小泉八雲記念館で、第三回目は二〇一一年十月にニューヨークの日本クラブで、そして第四回目は、二〇一二年十月にルイジアナ州ニューオーリンズのテュレーン大学で実施された。開催のたびに実行委員会を組織し、展示品も開催地にふさわしい内容に調整する。松江開催時には、展示

期間中の松江城の登閣者数が通常の一・五倍となり、自分のアート作品が「サムライ・キャッスル」に展示されるならと、ギリシャ・イギリス・アイルランド・オランダ・アメリカなどから出品したアーティストが自費で駆けつけ、関連国大使も来訪され、予期せぬ国際交流の場が展開した。重要文化財の天守（当時）で現代アート展を実施するには、当然批判もあったものの、結果的には松江城の底力が作品やパネル展示を輝かせてくれた。文学とアート、文化と観光、観光と国際交流の相関性を強く印象付けられた。

この事業は、単なる小泉八雲の顕彰事業ではなく、ハーンを二次的に活用した文化創造をめざすプロジェクトだと認識している。またこのプロジェクト自体を松江の文化資源と考え、松江市の魅力とともにハーンゆかりの世界各地で今後も機会があれば展開して行きたい。文学と芸術という異分野のコラボにより多分野の人々の関心を喚起し、出会いの場を提供すること、さらに、ハーンが足跡をのこした世界各地で開催することにより、松江と開催地の人々が異文化理解と交流を深めること、そして何よりもハーンのオープン・マインドから現代社会に必要不可欠な「共生の思想」について、来場者それぞれに考えてもらうことを期待している。

二〇一四年には、「オープン・マインド」という言葉があまり安易に一人歩きすることへの懸念から、八雲の生誕地のレフカダであらためて世界の九人（ギリシャ、日本、アイルランド、マルティニークの出身者で構成）のパネリストにより、八雲のオープン・マインドをさまざまな切り口から検証する機会をつくった。「国際シンポジウム”オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン“―西洋から東洋へ―」の開催である。そこで導かれた方向性は、以下のように集約できる。

> 常に八雲の心はオープンだった。だからこそ彼は素晴しさや美しさを、どんな肌の色であろうが、どんな階層の人であろうが、その真意を見ることができた。どんな存在もこの世の中には無駄なものはなく、独立した存在もなくすべて互いに影響し合って存在しているのだということを言っている。（中略）自分がこうだと思っていることが絶対ではなく、それが最終の結論でもなく、そこから次に新しい道が開かれていく。子どもたちには常にそういう新しい道を開いていくという場を提供しなければならない。(19)

未来を担う子どもたちへのオープン・マインドの継承である。その点では、松江で開催してきた子ども塾とも趣旨は一致している。また、このシンポジウム開催にあ

わせてレフカダにオープンした新しいハーン・ミュージアム（ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター）では、その後、ギリシャ各地から遠足や社会科見学ですでに二千人以上の子どもたちが訪れ、日本文化やオープン・マインドの大切さを学んでいると報告を受けている。シンポジウムの成果がさっそく生かされたようにも感じられ、「オープン・マインド・プロジェクト」の主催者のひとりとしてはとても喜ばしく感じている。

③小泉八雲庭園など

二〇一五年六月、アイルランド南部のトラモアに「小泉八雲庭園（Lafcadio Heam Gardens）」がオープンした。トラモアはダブリンから約三百キロ南にあるケルト海に面した保養地で、ハーンを養育した大叔母サラ・ブレナンはこの海を愛し三件の別荘を保有していた。それゆえ八雲も夏場をここで過ごすことが多く、泳ぎを覚え、乳母キャサリン・コステロから妖精譚や怪談を聞いて心を躍らせた場所だ。海と超自然の物語への共感を終生強く持ち続けた八雲にとって、この小さな海辺の町での体験は大きな意味を持っていた。従来、トラモアでは八雲への認識は高いとはいえず、顕彰の記憶としてはトラモア公立図書館にジョン・コール作の八雲のブロンズ像が設置されているくらいだ。二〇一二年に筆者が十八年ぶりに同地を訪問したことも引き金になり、「小泉八雲庭園」の構想が持ち上がった。

トラモアの歴史家アグネス・エイルワード氏は、眼下に海を臨む一ヘクタールのウォーターフォード市が管理する土地に注目し、ここに「小泉八雲庭園」をつくる計画を打ち出した。トラモア開発トラスト（Tramore Development Trust）という既存のＮＰＯ組織を活用し、その下部組織として「ラフカディオ・ハーン・ガーデン・プロジェクト」（以下、ガーデン・プロジェクトと略す）を組織し、本格的な計画検討に入った。そして日本万国博覧会記念基金やアイルランド政府の支援を得て、わずか、二年半ほどで完成にこぎつけた。

二〇一五年六月二十六日には開園式が開催された。式典でエイルワード氏は「庭はハーンと同じように時間の経過と共に、より日本らしくなっていくでしょう」と語り、来賓の渥美千尋駐アイルランド・日本大使は「日愛両国の交流の深化をもたらす庭になる」と述べた。最後に「ハーンが、ヨーロッパと日本のユニークなヒューマン・コネクションとなり、この庭園が、二国間を結ぶ架け橋になる」と同じく来賓で訪れたブレンダン・ハウリン公共支出・改革担当大臣が結んだ。筆者も、八雲がかけがえない体験をした場所に庭ができた喜びと、この庭がトラモアの文化資源として活かされることへの期待を

述べた。

そこで筆者を含む一同が認識したのは、これは海外によくある日本風庭園ではないことだ。エイルワード氏の構想に基づき、アイルランド人庭師マーティン・カレン氏のほとばしる自由な想像力が作り上げた八雲の精神を感じる庭である。京都の庭師、楠見一紀氏が三度通って、日本人と石についてアドバイスも行っている。

つまりこの庭園は八雲の人生を九つの庭で表現するもので、それぞれにテーマがある。「旅の始まり―トラモアとの縁」「船出―未来の予感」「アメリカへの旅」「ギリシャの庭」「日本への到着」「せせらぎの庭」「森林」「平和と調和の庭」「生き神様の伝説」だ。もともとあった湧水を「コイズミ・ファウンテン」と名付けて庭のシンボルに位置づけ、その流れが下に池をつくる。島根半島の霊場、加賀潜戸も猫の額ほどの大きさで再現してある。全体的には樹木に囲まれた回遊式の日本的な庭園とも見えるが、部分においてはギリシャやアメリカ南部、イギリスを象徴する庭もつくられており、八雲の人生における多様な異文化体験を表している。そして八雲の開かれた精神性（オープン・マインド）をトラモアの地から発信しようというコンセプトが感じられるのだ。

六月二十六日のオープン以来、アイルランド国内を中心に、イギリス・ドイツ・スウェーデン・アメリカ・日本などから、九月末までの三か月間で約四千人の入場者があったという。また、結婚式の写真をこの庭園で撮影したいという希望も複数持ち込まれた。アイルランドでも稀有なマリンリゾート地であるトラモアの新たな観光・文化資源として今後の活用が期待される。

また、二〇一六年五月六日には、八雲の母ローザの生誕地、ギリシャのキシラ島でローザの生家の公開を祝う式典が開催された。西林・日本大使、キルケニー・アイルランド大使、飛び入りでギリシャのバルタス・文化大臣もお祝いに駆けつけた。キシラの島民百人以上が式典に参列した。私を含めて六人がスピーチをしたが、その内容はローザと八雲を通してギリシャ、アイルランド、日本が友好を深め、島の文化資源として多くの人にハーンのヒストリーを知ってもらいたいという内容に収斂される。キシラ島の人々が八雲の母ローザとカシマチ家の歴史を今も誇りをもって語り伝え、新しい文化資源の誕生に期待を寄せていることに驚きと喜びを感じた。

おわりに

文学作品の一次的意義は、読者に作品鑑賞の対象として感動を与えることであり、また研究者に研究対象として作品論や作家論を創出させることであろう。本稿で紹

介した事例は、そのような本来の活用とは異なり、新しい意味づけをして地域資源の創造や観光、まちづくり等に活かすことを目的としていることで、文化資源的活用と見做すことができる。

一方で作家の顕彰活動にも長い歴史が存在する。ハーンについて言えば、松江で第一次八雲会が成立したのが一九一五年であり、二〇一五年で一世紀を迎えた。その八雲会は一時断絶したものの、新たな八雲会（第二次）が成立してからすでに五十年が経過している。年一回の機関誌『へるん』の発行や八雲作品の英語による暗唱大会である「ヘルンをたたえる青少年スピーチコンテスト」、「小泉八雲感想文・作詞」のコンクール、節目の年の記念事業など松江市と連携して顕彰活動を継続的に行っている。また、前述した一九三三年開館の小泉八雲記念館は、今日までに国内はもとより世界から訪れる多くの訪問者にハーン文学や松江の魅力を紹介してきた。ハーン来日百年祭が松江で開催された一九九〇年には年間入館者数が二十九万七千人を数えた。

本稿で紹介した事例は、こういった永年のハーン顕彰の動きと無関係に成立したわけではないが、それぞれ地域教育、未来の地域文化の担い手の育成、着地型観光プラン、八雲の精神性の発信と芸術文化や地域資源の創造など、最終目的が作家の顕彰ではないという点において、従来の顕彰活動との差別化をみることができる。あるいは、今後、顕彰そのものの方向性が、文化資源の創出にシフトしていくのかもしれない。

「文学」という無形文化を活用する動きは、ふるさと創生のうねりとも連動しながら、その深化が期待されている。ただし、主催者が作品や作家を深く理解し、質の保証を行うことが大前提となることは言うまでもないだろう。

なお本稿は、拙稿「文化資源としてのひと」（井口貢編『観光学事始め―「脱観光的」観光のススメ―』〈法律文化社、二〇一五年〉所収）および「小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の文化資源的活用に関する考察」（『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第五十四号所収、二〇一六年三月）をベースに、第七回尾道文学三昧（二〇一五年十二月五日）における講演内容を加味して、大幅に手を加えたものである。

注

（1）文化資源学会設立趣意書（二〇〇二年六月十二日採択）http://www.l.u-tokyo.ac.jp/CR/acr/about.html、最終アクセス日　二〇一六年八月二十一日。

（2）不昧は号で、本名は治郷。一八三八年に松平氏が松江藩主に封じられてから七代目にあたる。茶と菓子の文化を根

づかせるとともに、藩内の美術工芸の振興（楽山窯・布志名窯・漆工・木工の育成など）にも大きな成果をのこした。松江では今日でも、日常的に抹茶と和菓子を楽しむ習慣が市民の間に浸透している。

（3）八雲は来日前にニューヨークで、英訳『古事記』をハーパー社の編集者パットンから借りて読み、「とくにチェンバレン氏自身の『古事記』の訳と、―日本の神話と言語の形成に対するアイヌの影響の民族学的研究には特に興味を引かれました」（E・L・ティンカー著、木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』＜ミネルヴァ書房、二〇〇四年＞所収より）と感想を送っている。横浜到着後に本を購入し、脚注に至るまで再度精読。大国主命・事代主命・天菩比神（あまのほひ）など出雲神話に登場する神々の記述には多く書き込みを残している。

（4）『知られぬ日本の面影』の「杵築」の章には次のように記されている。「出雲はとりわけ神々の国であり、今もなお伊邪那岐命と伊邪那美命を祀る、民族の揺籃の地である」。（池田雅之訳「杵築」『新編　日本の面影』、角川ソフィア文庫、二〇〇〇年、百十五頁）

（5）The Chief City of the Province of the Gods.神々の国出雲の首都という意味で使った言葉。『知られぬ日本の面影』の一章に同じタイトルで二十二節からなる松江の観察記を遺している。

（6）松江では当時すでに搾乳業者が二件あり牛乳配達が行われていた。また松江大橋北詰にある山口薬局でビールを購入することができた。洋食を作れる鎌田才次という料理人もいて八雲を喜ばせた。

（7）P・D・パーキンズ「松江とハーン管見」『風土』第三冊（風土社、一九五一年）。

（8）八雲が一九〇一年九月二十四日付でイェイツに出した書簡。Murray,P., *A Fantastic Journey, The Life and Literature of Lafcadio Hearn*, Japan Library, 1993, p.47.に引用されている。

（9）チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌』二、平凡社（東洋文庫一四七）、一九八七年、九十九頁。

（10）一八九〇年十一月付け、松江からのチェンバレン宛書簡。*The Life and Letters of Lafcadio Hearn,vol.2*, Edited by Elizabeth Bisland, Houghton Mifflin Company, 1906, p.15.

（11）『生きているジャズ史』株式会社シンコー・ミュージック、二〇〇二年、十一頁。

（12）池田雅之訳『新編　日本の面影』角川ソフィア文庫、二〇〇〇年、七十三―七十四頁。

（13）ジョージ・ヒューズは、当時のイギリス文学に比して、八雲の現在形で物語る技法は先駆的なもので、その旅を現在時点の中に引き入れ、生き生きとしたものに変えてしまう効果を発したと指摘している。（ジョージ・ヒューズ

著、平石貴樹・玉井暲訳『ハーンの轍の中で―ラフカディオ・ハーン/外国人教師/英文学教育』研究社、二〇〇二年）

(14) 松江では、八雲のことを、親しみを込めて「ヘルンさん」と呼ぶ。八雲が島根県と結んだ条約書に「ラフカヂオ、ヘルン」と記載されたのがきっかけだった。

(15) 斉藤孝・山下柚実『「五感力」を育てる』中公新書ラクレ六十五、二〇〇二年、v頁。

(16) スーパーヘルンさん講座実行委員会編『子ども塾スーパーヘルンさん講座の十年』（スーパーヘルンさん講座実行委員会編集・発行、二〇一四年三月）本誌では、筆者を含む十七名の参加者や関係者が文章を寄せている。

(17) 「小説における超自然的なものの価値」『ラフカディオ・ハーン著作集』第七巻、恒文社、一九八五年、一〇三頁。

小泉八雲
（ラフカディオ・ハーン）
1889 年頃

(18) 展示内容は、世界各地の言語に翻訳された『怪談』の本と小林正樹監督による映画「怪談」の日本、フランス、旧チェコスロバキア、ポーランド、メキシコでの上映時のポスター等。その後、焼津小泉八雲記念館（静岡県焼津市）、池田記念美術館（新潟県南魚沼市）、島根大学附属図書館（松江市）、伊豆高原アートフェスティバル（伊東市）へ巡回した。

(19) *Proceedings, International Symposium on the Open Mind of Lafcadio Hearn-His Sprit from the West to the East*-,pp.62-63.(Edited by The Planning Committee for the Memorial Events in Greece to the 110th Anniversary of Lafcadio Hearn's Death,2014.)

「松江ゴーストツアー」
のちらし

―こいずみ・ぼん　島根県立大学短期大学部教授―

ギリシャのアメリカン・カレッジで開催された
現代アート展
「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」
（2009 年 10 月）

子ども塾の風景
完成した五感マップを前にして
（2015 年 8 月）

アイルランド・トラモアにオープンした
小泉八雲庭園（2015 年 6 月）

「松江ゴーストツアー」の実施風景
（月照寺）